戦争を知らない世代へ 55 福岡編

死の淵からの出帆

中国・朝鮮引揚者の記録

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ㊺福岡編

死の淵からの出帆

中国・朝鮮引揚者の記録

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ㊿
死の淵からの出帆——中国・朝鮮引揚者の記録

昭和54年10月17日　初版第1刷発行

編者©　創価学会青年部反戦出版委員会
発行者　栗生一郎
発行所　株式会社　第三文明社
郵便番号　101 東京都千代田区猿楽町2-5-4
振替　東京5—117823 電話03(294)8731(代)
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社　星共社

落丁・乱丁本はお取り換え致します　0036—7055—4438
1979 Printed in Japan

発刊の辞

戦争ほど、残酷なものはない。戦争ほど、悲惨なものはない――この言葉を心の叫びとできるものは、戦争の最大の犠牲者であった名もない庶民ではないだろうか。だが戦後生まれの世代が、ついに日本人の半数を越えた今、名もない庶民の戦争体験者が年々少なくなっていくのは止めることができない時の流れである。やがて戦無派世代の時代となったとき、誰が戦争がどのように悲惨で残酷かを語り継いでくれるのか――そう思うとき、この『戦争を知らない世代へ・福岡編「死の淵からの出帆」』もまた、一人一人の生命の中に反戦と平和の砦を築く貴重な遺産になるにちがいないと確信するのである。

この福岡編をはじめ『戦争を知らない世代へ』シリーズを編さんしたのは、戦争体験者ではなく戦無派の若い世代であることに注目されたい。口の重たい中国、朝鮮等からの引揚者を何回も訪問しては執筆を依頼したり、聞き書きをすすめていくなかで、彼らは間違いなく、戦争の残酷さ悲惨さを生命に刻み、筋金入りの平和の戦士へ成長していった。さらに彼らは、文字になった

それが体験の十分の一、百分の一でしかないと聞かされて唖然とするなかで、「本書の出版は終わりではなく出発点である。これからが本当の戦いであり、反戦平和の輪を粘り強く広げていかねばならない」と決意を語るのだった。このように本書は完成を待たずしてすでに大きな成果を収めていることを知っていただきたい。

戦争と戦争の谷間につかの間の平和があったといわれるほど戦争を繰り返してきた人類史上、三十四年間も平和（真実の平和であったかは疑問であるが、戦争状態がなかったという意味での）が続いている日本は、今なお戦争状態の諸外国が多いなかで、幸せな国といえるだろう。本書が現在の平和をさらに確かなものにすると同時に、世界平和へ一歩前進するための一助になっていくことを念願してやまない。

最後に、多忙ななか本書の取材及び編さんにあたった福岡県反戦出版委員会のメンバーの労に心から感謝の意を表するものである。

昭和五十四年十月一日

創価学会青年部
福岡県青年部長　佐藤政春

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目　次

発刊の辞

シベリヤからの叫び……福西よし子　9
二度の自殺も未遂に終わって……檜垣富美枝　18
強制労働にあえぎながら……後藤竹夫　34
飢餓の海を漂流一週間……松木ミツル　43
女、子供で混乱する新京駅……武田通子　59
銃弾飛び交う新京で……池田フクヨ　66
敗戦の責務を負って……水上ツヤ子　73
ただ吾が子を抱きしめて……結城百代　79
バッタの襲来のような略奪……石橋チヨノ　84
血に染まった人民裁判……安部ツルエ　90

第74団長として数百人を引率……田村辰己 95
病気の娘を背に必死の逃亡……有村かほる 100
暴虐の〝女狩り〟におびえ……五島道子 109
引揚船の中で命尽きた息子……宮本孝恵 115
盗賊団に囲まれ集団自決を待つ……匿名 123
報国看護婦として……後藤恵美子 132
八路軍と国府軍の攻防のなかで……吉村藤行 138
大陸での悲惨の因は日本人自身……原田筑紫 144
火の海と化した清津の町……田村富子 152
闇にまぎれて三十八度線を突破……芦塚マチ子 158
生涯で最も長い三日間……三谷千代子 165
決死の三十八度線越え……中西サダ子 171
目と耳を覆う惨状の連続……坂本ひろ子 177
粗末な木造帆船で脱出……松枝菊江 187
音をなくし第二の人生へ……中村貴美 193

母子四人が荷物同様に扱われ……柳瀬和子 203
妊産婦の家族だけで集団帰国……藤田フサ 210
赤米と雑草を食べながら……丸林直代 216
炎のサンダカンからジャングルへ……和田松枝 220
あとがき

死の淵からの出帆

――中国・朝鮮引揚者の記録

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

シベリヤからの叫び

福西　よし子（当時25歳。中国東北部・満州里）

昭和十九年、私は、中国東北部の北のはて、満州里（マンチュリー）という、ソ連との国境いの小さな町の税関に、主人といっしょに着任しました。

そして、あれは二十年八月の初めのことでした。朝の六時頃だったということは、はっきり覚えています。

ヒューン、ズドーン、ヒューン、ズドーン。

戦車のすさまじいばかりの砲撃です。目を醒まされたなどというような、なまやさしいものではありません。とにかく飛び起きたのです。家屋はビリビリ、ビリビリと動き、何とものすごい攻撃が開始されていました。日ソ不可侵条約の廃棄がソ連側から一方的にこの四月五日に通告されて以来、ソ連の侵入が予期されていましたから、常に心の準備はしていたのですが、いざその時となってみると、緊張と恐ろしさで始めは足と腰とがガクガク、ガクガクと震えて立ち上がるのがやっとでした。それまでは鉄道関係のソ連の人たちとは、表面上だけかもしれませんがふ

だんはわりに親しくしており、前々日にはソ連の領事さんともいっしょに会食をしたりしていたのです。ですから、ソ連軍が撃ってきたといっても、はじめはなかなか実感が湧きませんでした。

自動小銃の音がいよいよ激しく迫ります。主人は急いで暗号帳というか秘密書類を暖炉で焼き捨てました。そして皆が領事館に引き上げたのを確かめてから、私たちもリュックを背負って領事館に向かって家を飛び出しました。

外へ出ると、ブルブル、ブルブルと自動小銃の音が、私たちを後からも横から襲ってきます。銃撃で、ものすごい砂煙がモウモウと立ち上がる中を、私たちは無我夢中で走りつづけました。「ウッ、ウーン」――一瞬、主人の呻き声が聞こえたかと思うと、ゴロン、ゴロン、ドサッ。主人が足を撃ち抜かれ、前に何回か転げて倒れました。主人につづいて私も背中、肩、腕、手、腹部を撃たれ、その場に血みどろになって倒れこんでしまいました。どこからかねらい撃ちにされたのです。弾が貫通した時は、何といいますか、熱く燃える金棒のようなものをグッーッと突っ込まれたような激痛が走りました。二人ともすごい出血で、道路も血で真っ赤に染まりました。痛みと出血でだんだん気が遠くなっていきます。「ああ、これで自分も死ぬんだな。主人もいるし、おなかには十カ月の子供もいることだし、よし、日本人としてみっともない死に方だけはすまい」と心を決めて、こんな時のためにかねてから用意しておいた紐で首を締めてくれるよう、主人に

頼みました。

「よしわかった。締めてやる」という主人の悲愴な声に、私たちはお互いに目と目で最後の別れを交しました。しかし、主人は足に重傷を負い大出血をしているためか、手に力がはいらず、私は何度締められても顔がカーッと熱くなるばかりで、どうしても死にきれなかったのです。主人も「もう殺しきらんから仕方がない」といっているうちに、ソ連兵が後から後から続々と入ってきました。

重砲隊や戦車隊、歩兵隊が、倒れている私たちのそばをどんどん、どんどん通り過ぎていきました。手に手に小銃を持った兵隊でいっぱいでした。もうこれで絶対に殺されるな、と幾度も覚悟を決めました。けれど、運が良かったのでしょうか、憐れみの眼差しを向けるだけで、だれ一人銃を撃ち、とどめをさそうとする兵隊はいませんでした。

殺されずにはすみましたが、瀕死でまったく動けない私たちを、真夏の太陽は一日中苛酷なまでに照らしつけました。出血は止まらず、水も飲めません。のどはひからびて焼けつくほどでした。それに傷口といわず血という血の中にハエがびっしり集まり、ちょうどおからをふりかけたように傷口いっぱい卵を生みつけるのです。それは何ともいいようのないほどいやなものでした。

あたりが薄暗くなった頃、主人だけは、領事館に避難していた日本人とソ連の兵隊とによって、領事館の方へと運び去られていきました。まもなく夜がきました。黒く澄んだ夜空にきらきらと

星が輝き出しました。「ああ、自分はやっぱり死ねんのやろか。チチハルにいるお母さんも生きていて！」と、きらめく星をながめながら心の中で祈りつづけました。

そして白々と夜が明ける頃、ソ連の兵隊が一般の日本人といっしょに四人がかりで私を領事館にかかえ込んでいってくれました。そこは避難した日本人でいっぱいでした。むせかえるような暑さのうえ、水も食べ物もなく、赤ん坊はひもじさと暑さでひっきりなしに泣き、それはもう地獄のようでした。その地獄のような家に二日間くらいいたでしょうか。その間治療などほとんどしてもらえず、からだ中の傷口は激しく痛みつづけ、夜になるとその激しさは一層増し、夜通し唸っていました。傷口に目をやると、そこにはうじがわいていて、そのうじがそこの肉を食っているのです。その激痛といったら気も狂わんばかりでした。でも何が幸いするのかわかりません。うじが肉を食ってくれたおかげで傷口は化膿しなくてすんだのだそうです。

やがてそこに避難していた日本人の女性と子供たちだけは、自分の家へ帰されました。私は重傷を負っていましたから家へは帰されず、そこにほったらかしにされたままでした。自分の家へ帰されていく奥さんたちが帰りぎわに私の所へきて、「奥さん、きっと迎えにきますよ。気を確かに持っていてくださいね」と元気づけてくれるのですが、心の中ではとても生きてはいまいと思ったのでしょうか、泣き泣き帰っていくのでした。後で聞いた話ですけれど、家へ帰っても家財道具は何一つ残ってはいなかったそうです。すべて略奪されていたのです。さらに悪いことに

は家へ帰された日本人の女性や子供たちは、すべて後で殺されてしまったそうです。

その後、主人も含めて重傷を負った私たち四人は、どういう理由でどこへ連れて行かれるのか知りませんが、何日も何日もソ連のトラックに乗せられ、遠い所へと連れて行かれました。その間は、何も食べていないのと大出血をしているために、ソ連人にいろいろきかれても全然口をきけない状態でした。トラックが、テントを張って造っただけの粗末な野戦病院らしい所に止まるたびに、こんどこそは殺されるんだと覚悟を決めたものです。

けれども、そんなこともなく、二つ三つと過ぎていくうちにソ連領のチタという町に着き、そこで病院に収容されました。その病院はソ独開戦前は小学校だったそうです。私たちはソ連人やドイツ人といっしょに収容され、やっと治療らしい治療が受けられました。

そして身重だった私はそこで子供を生みました。しかし、ソ連兵の間に疱瘡が流行し始め、私の子供にもそれがうつってしまい、それがもとで子供は四カ月くらいで死んでしまいました。短い命でした。葬式をすることなど許可してくれません。何のために生まれてきたのでしょうか。何のために……。

傷もよくなり、体力も少しは回復してきました。愛児を失った悲しみから癒える暇すらなく、こんどは何日も汽車に乗せられて南東に下り、カリムスコエという町に行かされました。そこには日本兵捕虜が強制労働者として数多く集められていました。彼らは腰まで水につかりながら石

炭を掘らされたり、極寒の原始林で材木を切り倒さねばならなかったり、とにかくものすごい重労働を強いられていました。その激しい労働と過度の栄養失調とで、私の見た人はほとんどミイラか骸骨のように痩せ衰えていました。それでも働かなければなりません。そうしなければ食事を与えてはくれないからです。そういった重苦に喘ぐ同胞約六百人分の衣類の洗濯をするのが私の仕事でした。

この町に着いて半年ほど経ってからのことでした。足を撃ち抜かれた主人が、足を切断したあとの傷が悪化してついに死んでしまったのです。それは寒い冬のことでした。主人の死体はかちかちに凍りついてしまい、苛酷な労働に耐えきれずに死んでいった同胞の死体といっしょに、ボーンとトラックの上に材木同様に投げ上げられ、積み込まれてしまいました。そして、その死体はあらかじめ掘ってあった大きな穴の中に無造作にほうり込まれてしまったのです。悲しかった。つらかった。でも他の人たちはいいました。

「奥さんの傍で死んでいけたんだ。それだけでも幸せ者だよ」

しかし私は思いました。たしかにこの人たちのいう通りかもしれません。けれども私の愛する夫が死んだのです。しかも生まれたばかりの子供につづいてです。夫が、子供が、いったい何をしたというのです。私は愛する者を戦争でいっぺんに奪われてしまったのです。私がいったい何をしたというのです。こんなことがあっていいのでしょうか。心は狂わんばかりに乱れていまし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.